

○海外体験学習プログラム／インド共和国【夏季】

■参加学生	
■テーマ、企画・引率教員	
「教育 NGO の活動事例を通じて、インドの経済成長と社会発展について学ぶ 9 日間」 経済学部 准教授 島根 良枝	

■行程 2017年9月4日（月）～9月12日（火） 9日間			
日程	時間	活動内容	場所
9月4日（月）	6:30 8:00 12:30 17:35	伊丹空港集合6:30 伊丹空港JL3002(8:00) 発 成田空港(9:20) 着 成田空港JL749(12:30) 発 デリー空港（17:35）着 【Villa33泊】	デリー
9月5日（火）	午前 午後	●ST. ANTONY'S SR. SEC. SCHOOL（ミッション系の女子教育一貫校）にて視察とヒアリング ●Pratham（プラサム、成果を上げている教育NGO）を表敬訪問・視察の詳細を打ち合わせ ○インド門、国会議事堂、官邸周辺を移動の途中で見学 ○ホテルにてミーティング 【Villa33泊】	デリー
9月6日（水）	午前 午後	●デリー大学サウスキャンパスにてヒアリング、大学学寮で懇親と昼食 ●スラム地域（バザントビハール）にて、居住者に対するヒアリングと地域内の視察 ○ホテルにてミーティング 【Home@F37泊】	デリー
9月7日（木）	午前 午後	●商業地域（INA市場およびその周辺）にて視察とヒアリング調査 ●Delhi haatにて各州の特徴を学習 ○コンノートブレイス、レッドフォート、オールドデリー、マーケット（Khan Market）を視察 ○オールドデリーでは、一つの通りに様々な宗教の寺院が建っている様を見学 ○ホテルにてミーティング 【Home@F37泊】	デリー
9月8日（金）	終日	●Pratham（プラサム）の活動3つのプログラムを視察 ①スラム街にあるプレスクール、②小学校内で行われるLibrary Program、③スラム街にあるLearning Centerでの学習支援 ●Learning Center周辺のスラム地域内で視察、子供へのヒアリング調査 ○ホテルにてミーティング 【Home@F37泊】	デリー
9月9日（土）	終日	●出稼ぎ労働者の集積地であるBurari村でヒアリング ○高級なマーケット（Khan Market）、モティバークを視察 ○ホテルにてミーティング 【Villa33泊】	デリー
9月10日（日）	終日	●出稼ぎ労働者の大居住地域であるKhoda地域で視察とヒアリング調査 ○ホテルにてミーティング、ガイドのMr. Singhさんからヒアリング 【Villa33泊】	デリー
9月11日（月）	19:35	●Prathamを再訪し、今回スタディツアーの成果を報告するとともに、日本の大学生にできる協力について意見交換 デリー空港JL740(19:35) 発 成田空港（7:25）翌到着	デリー
9月12日（火）	7:25 10:30 11:40	成田空港着 リムジンバスにて羽田空港に移動 羽田空港JL113発 伊丹空港（11:40）着 解散	



レッドフォールにて先生と参加者全員で

出発の日、始発電車に乗って空港へ向かい、走って航空機に乗り込んだところから始まったインドでのスタディツアー、私にとってとてもすばらしい経験となりました。企画、引率いただいた島根先生と、様々な学部学年の5名の学生でのツアーでした。そもそも私がこのスタディツアーに参加しようと思ったきっかけはこのプログラムでは普通の旅行では絶対にできない体験ができると思ったからでした。島根先生をはじめ、多くの方に助けられ、本当に濃い時間を過ごすことができました。国際教育 NGO プラサムの活動の視察を中心にインドデリーの状況を体験し、日本に帰国後は自国の状況、課題を見つけ解決できるよう、インドでたくさん行動し、たくさん考え、勉強会も毎晩日を跨いで行いました。ツアーに参加する前はインドに対して「IT 大国、英語が通じる、カレーなど辛い食事」といったイメージがありました。しかし、行ってみると、インドは想像した以上に多様な国で、実際にその場所に行き、現場で気候や匂いや環境、雰囲気を感じなければわからない複雑な国だと感じています。



ラーニングセンターにてプラサムの活動の様子(折り紙を一緒にしました)

私たちは、日本でいう幼稚園から高校までのカソリックの一貫女子学校の見学、デリー大学での大学生へのヒアリング、そしてプラサムの活動見学を通じて主に 5 か所の教育現場を視察しました。女子学校は、全員決まった制服をきて英語で授業を行っています。私たちが視察した日はちょうど「ティーチャーズデイ」といって先生に感謝の思いを伝える日だったのですが、生徒が自作の手紙やコメントを先生に渡しており、その様子からは先生への深い尊敬の気持ちが感じられました。ヒアリングを行ったデリー大学はインドでも名門のカレッジ制の総合大学で、通信で学ぶ学生も含めると 22 万人もの学生が勉強しています。私は政治学を学ぶ学生と話しをすることができました。女子学院への訪問でも感じたことですが、みなさん学習に対して大変前向きです。そして、素直であるという点でも共通していました。教育 NGO プラサムでの視察では、スラム街に幼児教育のスペースをつくり小学校へ入学前の準備をする拠点、学校内にプラサムの教室を借りそこで本の暗唱や発表を行っている拠点、放課後や学校にいけない子どもたちのためのラーニングセンターという 3 つの活動を見学させていただきました。プラサムは学校にいけない子や学習が遅れている子どもを支援の対象として活動しているのですが、一番印象に残っているのは、本当にたくさん子どもたちがどこの学びの場にも集まっているということでした。それはスラムや学校内など多様な場所にプラサムが子どもたちのために学習できる場所をたくさん作っているということにほかなりません。その環境があることで子どもたちは好奇心に仕掛けて学習できるようになるのだと思いました。この「場所を提供する」というやり方はほかのいろいろな事柄にも応用できるのではないかと感じています。

プログラム中には出稼ぎ労働者へのヒアリングなども行って、格差などの厳しい現実があるということも感じました。それも含めて 9 日間本当に貴重な体験ができました。このプログラムに協力いただいたすべての人に心から感謝しています。そしてこの体験を生かせるよう今後活動していきたいと思っています。

インドで過ごした8日間は、とても考えさせられることばかりでした。初日、2日目はクラクションの騒音、車の窓を叩く物乞いの人、言語の壁など、日本とは異なる環境に慣れないままに時間が過ぎていきました。インドでの生活に少し慣れてきた3日目に、デリー大学に行き、カフェテリアで学生たちと学校教育について議論する機会がありました。しかし、彼らの早い英語が聞き取れず、話の内容がほとんど理解できなかったため、まるで蚊帳の外に置かれているように感じました。議論のあと、学生たちに個人個人で話をさせてもらいましたが、あまり話が弾みませんでした。質問されたことの中には、これまで自分が深く考えたことのない内容や、自分なりの答えが見つけれず答えられなかった内容もありました。今まで様々な問題に目を向けず、じっくり考えてこなかったからだと痛感し、とても悔しい思いをしました。



翌日の教育プログラムのため、折鶴を折るメンバー

4日目の夜、次の日にプラサムが活動している学校に行き、授業を見学する予定だったため、普段よりも念入りにミーティングを行いました。事前に子どもたちや先生に聞いてみたい項目を考え、これまでの活動を振り返り準備をすすめました。そして5日目に、環境も対象年齢も異なるプラサムが運営する3つの学校の授業を見学しました。子どもたちが、とても積極的に、楽しそうに学んでいる姿が印象に残りました。見学後、スラム街にある学校でも見学させてもらいました。何もない薄暗い小さな部屋で、とても多くの子供たちが、やはり楽しそうに学んでいました。その時、日本では、勉強ができる環境が当たり前用意されているの



行く先々で見かけるゴミ捨て場

にも関わらず、学びに対してなんと積極的でないのだろう、と、自分自身や日本の状況を残念に感じました。

6日目は、住宅街に行き、屋台の揚げパン屋の方や、通りかかった方に教育についてどう考えているのか、お話を伺いました。7日目には、地主の方、貧しい家族の方々、などにお話を伺いました。土地を持っているか、働ける息子たちが健在しているかなど、努力しても変えられない要素により、人々の暮らしは全く違うものになります。また、子どもたちに受けさせることのできる教育の質も全く変わってきます。経済が成長しても豊かな人はほんの一握りで、その反面、貧困で苦しんでいる人がたくさんいるインドの現状がとても理不尽で、この現状を私たちはどうにもできないの难道うかと、やりきれない気持ちになりました。

インド滞在最終日の8日目には、学校見学の機会を与えてくださった NGO プラサムの局長の方にご挨拶に伺いました。実際に見学して何を感じたのか、これから自分たちはどうしていこうと考えるのかなど、伝えたいことを何日間も考えて、構成を練り、プラサムの方達に発表させて頂きました。その結果、考えがきちんと伝わり、双方に有意義な時間を過ごせたと思います。

「海外に行くことができて良かった」と、漠然とした思い出として終わらせることなく、自分の周りで起きたこと、学んだことについて考えを深め、自分自身についても見直すことができたことが、このツアーでの一番の学びだと感じています。

急速な経済発展を遂げているインドにあって、まだまだ貧困のために教育から取り残されている子どもたちへ教育支援を行っている教育 NGO プラサムの活動に関心があり参加しました。プラサムは、インドから始まり、現在世界の発展途上国で活動が広がっています。私は基礎的な学力が、社会においても有効な力となっていると考えており、プラサムの教育は本当に社会から取り残された人々の力となっているのかを知りたいと思っていました。今回、デリーでプラサムの活動を、3つの現場で視察させていただきました。

最初に訪れたのは「プレスクールプログラム」という、就学前の幼児が先生と楽しく学習している所でした。先生は、ボールやカップを使って色を教えていました。歌も一緒に歌い、まず楽しく教育環境になじんでいく第一歩が大切にされていました。

次は、「ライブラリープログラム」でした。先生から、一人ひとりの生徒の歩み具合を確認し、記録しているノートを見せてもらいました。問題がどこまで解けているかわかるようにしてあり、基本的な学力を定着させるための手立てが考えられていました。

3か所目は、「ラーニングセンター」で、そこでは私たち日本人学生が生徒に折り紙で手裏剣や紙飛行機の作り方を教える時間を設定してもらうことができました。一人の女の子の行動が心に残っています。彼女は、手裏剣を折るのに遅れてしまっていたので、私が一緒に手伝ってあげました。完成した折り紙の手裏剣をととても喜んでくれたのですが、その後、少しずつ完成した手裏剣をもとにもどし、最初から作り方を確認し始めたのです。それから周りの男の子に作り方を教えてあげていました。学びたい、身につけたいという意欲と共に、自然に教えあう姿勢ができていることにとても感心しました。絵を描く時間でも、足りない消しゴムやペンを貸し合い楽しそうに描いている様子も私にはとても印象的でした。足りていない物がいろいろあっても譲り合いながら工夫しながら自ら学ぶ喜びが自然と伝わってくるのです。「学ぶ」ということの忘れてはいけない大切な基本だと改めて考えさせられました。



プラサム、ラーニングセンターでの子どもたちと

プログラム中には、様々な環境の大人、子どもたちに出会い、話を聞くことができました。その中で、子どもに算数を教える機会を得ることができたのは本当に貴重な経験になりました。「インドの数学はすごい」といわれていますが、当然、算数が好きな子、嫌いな子がいて、かけ算の学習にすいすい答えられる子、答えられない子、答えを英語で言ってくる子といろいろな子どもがいました。8年生（中学2年）や9年生（中学3年）でも簡単な掛け算ができない子もいて、基本的な学力の定着は大きな課題だと思われました。しかし、できる、できないに関わらず、私たちに興味を持ってくれたこと、嫌がることなく話をし、最後まで一緒に勉強についてきてくれたことは、とても嬉しいことでした。プログラムに参加する前には予想もできないほど様々な職業、立場、環境、年齢の人々に接する機会がありました。そして、実際に話し、交流することで今のインドの一端を知ることができたと思います。数多くの機会を作って下さった島根先生、インドの方々に心から感謝しています。



インドの少年と掛け算の勉強を始める

私は、今回の夏季海外体験学習プログラムに参加しとてもよい体験ができたと思っています。人の話を聞くことや、誰かが撮った写真をみて物事を判断することはできます。しかしそれは、確かな事実とは限りません。実際に自分で現地に行き、自分の目で確かめることが大切なのです。今回、インドを自分の目で見ることができ、自分が今まで思っていたこと、考えていたことは間違っていることばかりだと気がつきました。そのことに気づくことができて本当によかったと思います。私が心に残ったなかの3つを紹介します。

1つ目は、スラムに行ったことです。普通の海外旅行では、絶対に行くことはできません。現地のガイドさん、引率いただいた島根先生のおかげでスラムの中に入ることができました。その時はなかなかスラムの中に入ることができず、先生と、ガイドさん、現地の方が長い話し合いをしてようやくスラムに住んでいる方に案内されて中に入ることができました。スラムの中の道はごみが多く、においもくさかったです。私たちはスラムの中にある学校に案内されました。その中では、日本と同じように先生が子どもに勉強を教えている光景が広がっていました。スラムの中にも学校があったことに驚きました。学校にはパソコンなど機材もあり先生たちは私たちに親切にいろんなことを紹介してくれました。先生たちがここで勉強を教えることができて幸せだと言っていたのがとても印象的でした。



スラムの中にある学校を見学、ヒアリングもした

2つ目は、インド人は九九の計算がとてもしやすいという話についてです。日本では有名な話ですが実際にはそんな複雑な九九計算はできないと通訳の方が言っていました。まちの子どもにも計算をしてもらいましたが、二桁どうしの九九はできませんでした。99×99などのきる人はインドのとて優秀な大学のほんの一部の人だけだそうです。実際に現地に行くことで知れたことだと思います。

3つ目は、食事のことです。1日目は、日本から着いた日でマーケットにある店で夜ご飯を食べました。これがインドでの初めての食事でした。一緒にいた仲間は、普通に食べていましたが、私はたくさん出てきた料理のうち、一つも口に合わなくて、まだ1日目なのに「私にはこの先食べられるものがあるのだろうか。」と心配になりました。しかし、2日目の家庭的なホテルの夜ご飯がとてもおいしく、それ以後、最終日までとても満足した食事をとることができました。先生も1日目のご飯は、あまりよくなかったとおっしゃっていたので、一安心しました。ちなみに、私が食べた中で1番おいしかったのは、ソフトクリームです。私たちは、2つのホテルに泊りましたがどちらのホテルにも出ていました。とても甘く濃厚で、バターチキンという食べ物もおいしかったです。インドの食べ物については、脂っこいものも多く、カレーも多くて胃に重たい感じです。

インドに行くことで、実際に自分の目で見て感じる事ができ、とても良いスタディツアーとなりました。今後も大学生の間にいろいろな国に行き、自分の目でいろいろなものを確かめたいと思います。



私はこのプログラムで初めてインドに行きました。インドに着くと、五感からインドと日本の違いをたくさん感じました。自然の多さ、インド独特のにおい、37度という暑さ、車のクラクションの音の多さ、日本とは違うスパイスの効いた辛い料理など様々です。日本との違いも感じましたが、インドのご飯はどれも美味しかったです。今回は時期的に虫も少なく、雨も降らず、暑さはあってもじめじめしておらず、道路は普通に歩きやすく、過ごしにくくはなかったと思います。



デリー大学では寮でのランチに招待していただいた

インドではスラムの視察に行ったり、出稼ぎ労働者の方に話を聞きに行ったりなど毎日活発に活動して、とても充実した日々を過ごせました。ここでは、その中で私が行った活動の2つを紹介します。1つ目はデリー大学への訪問です。大学では、学生たちがたくさん話を聞かせてくれました。彼らは将来の夢をしっかりと持ち、自分のやりたいことのために勉強をしています。そのために勉強することを当たり前のようになっている、本当に一生懸命取り組んでいました。それを聞いて、すごいと思うと同時に自分も見習って頑張ろうと勉強へのやる気と勇気をもらいました。また、私が見習おうと思ったのは学生たちの親切なところ。事前に約束をしておらず、たまたま話しかけただけなのに、本当に長い時間会話を付き合ってくれ、私たちの拙い英語も一生懸命聞いてくれました。会話の後には学生寮にランチに誘ってくれ、私はうれしいと同時に大変驚きました。自然にでてきた親切なおもてなしに心から感心しました。私なら日本にいて見ず知らずのそれも外国の人に急に話しかけられて、このような親切な対応ができるだろうかと思いました。彼らと

出会って、刺激をたくさんもらい、自分の考え方も変わりました。

2つ目はインドの NGO 団体であるプラサムでの活動です。プラサムは、インドの子どもたちが勉強できる場所を作り、教える側の先生や若者を指導、訓練し、子どもたちの読み書きの能力向上を目指す活動を行っている団体です。今回は3才～5才の子どもたちがいるプレスクールと小学5年生がいる library program と小学4、5年生がいる Learning center の3か所を見せてもらいました。どの場所でも先生の授業を行うテンポがよく、生徒は話している先生の顔をしっかり見ていて、年齢や場所に関係なくみんな生き生きと楽しそうに勉強していました。子どもたちと同じ気持ちになって楽しんで勉強を教えている先生もすばらしく、そうやって先生と生徒が互いに影響し合うことで良い環境が生まれているのだと感じました。また、子どもたちにとって大切な存在である先生を育てているプラサムもすばらしいと思いました。ここでは勉強できる環境にいられることのありがたさを感じ、日本で勉強している学生、子どもたちにもそんなふう感じてほしいと思いました。また、日本でもこのプラサムの活動を支援する人が増えるとよいと思います。

今回、インドでたくさんの人と接して、たくさんの場所に行って、言葉では言い表せないほど勉強になりました。たくさんの刺激を受け、考え方や視野も広がり、人として成長する機会を得られたと思います。このスタディツアーに関わってくださったすべての人に感謝し、この学びを活かしてこれからも頑張っていきたいと思います。



プラサムの活動拠点の一つ、3才～5才の子が学ぶプレスクールでの様子

今夏実施した海外体験学習プログラム「教育 NGO の活動事例を通じて、インドの経済成長と社会発展について学ぶ 9 日間」の柱は、①成果を上げている教育 NGO Pratham の活動から学ぶ、②インドの経済成長と社会発展について知見を広げる、③両者を踏まえて自分たちに何ができるかを考える、の 3 つです。

本学でも在学中にゼミやサークル活動、個人として途上国で教育支援に携わる学生が少なからずいるのは頼もしいものの、“効果のある支援を行う”という点でレベルアップを図る方向を探りかねているように見受けられます。私は、効果のある支援を行うには、現地の良い実践例から学ぶことと、その国の経済社会の幅広い文脈の中で支援相手を理解し方法を工夫することが不可欠だと考えています。良い実践例を知り、問題の根深さと対処の難しさを知ると、自分たちにできることは何もないのではないかとまずは無力感を感じるでしょう。それを一旦は経験した上で、現地での人々との関わりや問題の深刻さを念頭において、自分たちにできることを真剣に考え、行動につなげていって欲しいという思いで今回の海外学習体験プログラムを企画しました。



チャイで一服のひと時も

以下では 3 つの柱について、簡単に説明と報告をします。第 1 の成果を上げている教育 NGO とは、Pratham (プラサム) という組織です。1994 年に設立されて以来、活動地域をムンバイからインド国内の多くの州に広げただけでなく、海外でも支援活動を行っています。

その活動が世界的に評価されているのは、国連をはじめとする国際機関の教育支援が“子供たちを学校へ”と就学を促す意味合いの強いものであるのに対し、プラサムの支援が“子供たちを学校へ、そして学びを”と、就学と学習成果の両者を重視した活動で成果を上げているためです。活動の特徴の中でも、独自の学習プログラムの開発、それらを実施するチューターの登用と訓練、学力データの把握が重要でしょう。チューターの動員には若い女性に活躍の場を与えるという副次的な成果もあり、データの把握は自らの活動の改善に資するだけでなく、政府や地域、家庭の理解を得つつ活動を進めることに役立っています。



プラサム・ライブラリープログラムでのチューターと生徒の様子

私たちはプラサムの事務所で彼らの組織的な運営の一端を垣間見、実際のプログラムの現場 3 カ所でプログラムの実施に携わるコーディネーターとチューター、協力関係にある学校等の関係者、さらに子供たちにヒアリングを行いました。スラム地域にある幼児教育の部屋は粗末でしたが、チューターの教える内容は、「緑という言葉と色は教えたけれど青はまだ教えていないので使わない」など、子供たちを戸惑わせないよう細かな配慮がなされたものでした。また学校内に設けられたライブラリープログラムの教室では、19 歳の学生チューターの教えるスキルが非常に高いことに驚きました。学習内容の工夫もチューターの訓練も、プラサムが常に現場を視察しながら改善に努力して

いるものです。引率した学生たちも準備してきた折り紙を使ったプログラムを実際に行わせてもらい、“子供たちを学校へ”だけでなく“子供たちを学校へ、そして学びを”というプラサムの理念に沿った支援をするためには、内容の工夫やスキルの向上が必要と気付くことができました。



私立一貫校でのヒアリングの様子

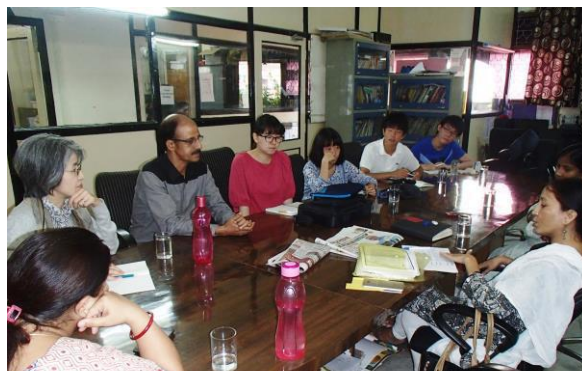
第2の柱、インドの経済成長と社会発展について知見を広げるについては、出稼ぎ労働者の居住区、スラム地域、異なる所得階層の居住地域や商業地域をそれぞれ複数と、大学を1校訪れ、ヒアリングを行いました。詳しく書くのは別稿にしたいと思いますが、学生たちは、出稼ぎ労働者と彼らに部屋を貸している家主の仕事と暮らしぶり、公立校に通う子供たちと私立校に通う子供たちやデリー大学生の勉強への姿勢と将来へのイメージ、大卒ビジネスマンや無免許オートリキシャ運転手と非識字老人たちの仕事の来歴と将来の希望、インド政府の支援スキームに頼る困窮者と受給に賄賂を要求する役人といった、大きなコントラストをなす人々から多様な生の声を聴くことができました。いずれも、引率した学生たちにとってインドの経済社会を幅広く理解する上で役立つだけでなく、教育支援に限った視点からも、出稼ぎ労働者の子供たちの教育支援がとくに困難なことや、英語教育の取り入れを巡るジレンマといった重要な問題に気付かせてくれるヒアリングでした。



水牛 40 頭を飼って家族を支えた老夫婦一家のご自宅でヒアリング

第3の自分たちに何ができるかを考えるという柱は、インド滞在中から帰国後の学習期間を経て、まだ継続中の課題です。最終日にプラサムの事務所でラップアップミーティングを行った際には、学生たちの熱心なフィードバックと帰国後の活動についての意欲をプラサムのスタッフも好意的に受け止めてくれました。引率した学生達には、帰国後直ぐに学期が始まり時間の制約もあるでしょうが、自分たちの受けたサポートをしっかりと受け止めて、帰国前の熱意を今後に生かしてもらいたいと願っています。

最後に、半年以上にわたる事前準備から現地滞在中に様々な形でサポートしてくれたプラサムをはじめとする諸団体のスタッフと友人達、とくに Ms. Kakaji と Manisha、現地アシスタントの Pawan に、改めて感謝したいと思います。また学生の旅費を補助して下さった大学およびボランティア・NPO 活動センター、各種手配でお世話になったマイチケットの山田社長、岩井様、きめ細かくご対応下さったボランティア・NPO 活動センター上手さんにお礼申し上げます。



最終日にプラサム事務局でラップアップミーティングを実施